

# 学長としての山崎春成先生

経営学部 今 木 秀 和

山崎春成先生は1996年3月末をもって桃山学院大学学長としての任期を全うされました。そして学長職の任期終了と同時に桃山学院服務規定の定めるところにしたがって学校法人桃山学院を退職されました。学長職にあること六年、重責を完遂なさったことに対して、私は深甚の敬意を表します。

山崎春成先生の学長職在職中、私は教務委員長（2年任期の2年目のとき）、学長室委員（任期1年間）、経営学部長（任期2年）として比較的身近なところで先生と接しておりました。そのような先生との接触と交流のなかで、山崎先生が真摯に、誠実に学長職に取り組んでおられる姿勢に深い感銘をおぼえ、強く印象づけられました。

学長は大学という組織のリーダーでありますから、リーダーシップの発揮が期待されていることはいうまでもありません。それとともに組織内外で発生するコンフリクトを調整する能力が必須でありますし、肉体的、精神的に頑健な体力が要求されるのも誰もが認めることであります。しかしかには有能で、リーダーシップがあり、調整能力にすぐれ、タフな体力に恵まれているとしても、個人としてできる仕事の範囲は限られています。私は学長の最大の任務は、「人々に働いてもらうようにすること」にあるのではないかと考えています。学長職は行政職でありますから、行政的な大学の課題を教職員の協力を引き出して遂行しうるようにすることこそ学長の任務であると考えています。この点で山崎学長は適任であったと私は評価しております。

山崎学長は学長職の重責を全身でおうけとめになりました。決して口先だけのポーズをおとりになりませんでした。器用に立ち回ってもっともらしい

振りをされようとはしませんでした。ひとつひとつの行政的課題に真摯に取り組んでゆかれました。つねに組織の中核としての存在感を教職員に与えておられました。教職員が安心して仕事ができるとの信頼感を醸成しておられました。

ときに失言とみえる発言があったり、過激と思われる意見をいわれたこともありましたが、それは周りの者の意見や判断を呼び出すための誘い水ではないかと思われたのでした。山崎学長のそのような言動の背後に、人々の微笑を誘発する、えもいえぬユーモアが伏在していることが多かったように憶えています。山崎学長の人柄の一端があらわれているものと思います。

大学の全面移転という他に例をみない事業を、事業の中核的担い手としてみごとに決断され、遂行されました。年来の課題であった組織改革にも着手され大きな前進を果されました。経営学研究科、文学研究科の大学院設置が実現したのも山崎学長のもとにおいてであります。

学長としてぜひやっておきたかったこと、手をつけておきたかった課題は他にも種々あったことだろうと推察しておりますが、おそらく最大の心残りには学部・学科増のいわゆる「臨定後対策」ではなかったかと愚察しております。任期をわずかに残して、重大な戦略的課題に直面されたところに山崎学長の苦悩があったのではないのでしょうか。

山崎学長は、「臨定後対策」について一応の方針をたてて次期学長に実質的に課題を引き継がれました。任期直前の学長としてはやむをえないことであつたかと考えていますが、しかし任期の交代期における戦略的課題への取り組みをどのように行うべきかという点で組織の問題として考えておくべき教訓が残されたように私は思います。学長は任期という期限のなかで職責を果さなければなりません、課題の方は任期にかかわらず重くのしかかってくる。これは学長個人の資質や能力でどうにかなるという問題ではなく、まさに組織の問題なのです。このような問題を、学長個人に負担をおわせ、苦悩を強いるようなことになってはなりません。組織としてどのように対処すべきなのか、検討しておくべきではないのでしょうか。

山崎学長の六年間の貢献に対して重ねて敬意を表し、ふたたびおだやかな読書の日々、研究の日々に戻られることを心よりお慶び申し上げます。ご健勝を念じてやみません。